

ノスタルジーの国際関係論

今 林 直 樹

はじめに

本稿は「ノスタルジー」(nostalgie)⁽¹⁾を鍵概念とする国際関係理論構築の可能性を探ることを主たる目的とする。

ノスタルジーとは日本語で「懐旧」「懐古」「郷愁」といった訳語を持つ言葉であり、「昔を懐かしく思う気持ち」「故郷を懐かしく思う気持ち」といった意味を持つ。それらに共通するのは「懐かしさ」である。

人間は「懐かしさ」を感じる動物である。この懐かしさを感じる対象は青春時代のような青年期、故郷や思い出の地といった場所、さらに友人や世話になった人、記念品や思い出の品など様ざまであるが、いずれにしてもそれらはすべて懐かしさを感じる主体の何らかの「記憶」と関係している。そして、その記憶は基本的には「美しい」「楽しい」「輝かしい」など、何らかの正の価値を持つ形容詞と結びついている。その記憶は心理学でいう「エピソード記憶」と呼ばれるものに属する⁽²⁾。エピソード記憶は、エピソードや出来事が起こった日時と場所が特定される記憶であり、蓄積される記憶の時間的範囲が最長で人の一生の大部分に及ぶこともあり、長期記憶に分類される。それは通常は潜在記憶であるが、何らかの契機を得て顕在化する。同窓会で久しぶりに友人と会い、思い出話に花が咲く。学生時代に一人暮らしをしていた場所を訪れ、その頃によく通っていた店を久しぶりに訪ねる。部屋を片付けていたら、昔、友人と行った旅の写真や土産品が出てくる。テレビやラジオから青春時代によく聴いていたヒットソングが流れてくる。こうしたことを契機として、人は懐かしさとともに自身の記憶を蘇らせる。そして、その心理状態を表現して「ノスタルジーを感じる」というのである。

記憶が過去において起こったエピソードや出来事と必ず結びついている以上、ノスタルジーもまた、その対象がどのようなものであれ、過去と結びついている⁽³⁾。人がノスタルジーを感じる時、その契機はその人が置かれている「現在」において得られ⁽⁴⁾、それまでに潜在的に蓄積され、保存されていた膨大なエピソードの中から特定の記憶が懐かしさとともに選択される。すなわち、その人の「現在」がノスタルジーを喚起して特定の「過去」を選び出す契機となるのである。このことから、ノスタルジーには「現在」と「過去」を結びつける機能があることがわかる。

また、ノスタルジーを「故郷を懐かしく思う気持ち」と考えるとき、ノスタルジーは故郷と他郷を結びつける機能を持つ。すなわち、故郷へのノスタルジーは、自分が故郷にいないことから喚起

されるものである。石川啄木の「ふるさとの 訛なつかし 停車場の人ごみの中に そを聴きにゆく」という句は、啄木の故郷へのノスタルジーそのものである。他郷で故郷の訛を聴くことによって喚起されたノスタルジーは、啄木において他郷と故郷を結びつけた。故郷に対して慕る懐かしい思いは自身が帰郷することによって満たされるであろう。

この故郷と他郷が国境を越えて存在しているとき、そして故郷と他郷の間に現在と過去を結ぶ時間的關係が存在するとき、そこに「ノスタルジーの国際關係論」の地平が開ける。本稿では、「国際關係論」を、主体の点から国家に限定せず、非国家主体も射程に入れて考察していく。そのため、「国際關係」については、国家間關係 (international relations) のみならず、非国家主体間關係 (transnational relations、subnational relations) も含めた複合的な關係を考察する学問領域として取り扱うことにする。

これらのことを踏まえて、本稿では、以下、ノスタルジーの概要を整理する作業を通じて、その国際關係論への応用可能性を探っていくことにする。

第 1 章 ノスタルジーの概要

第 1 節 ノスタルジーという現象

(1) 病理現象

よく知られているように、ノスタルジーという語は、スイス人の医師であった Johannes Hofer が 1688 年にラテン語で発表した論文の中で提示した概念である⁽⁵⁾。それは、Hofer がギリシャ語の νόστος (帰郷・帰還) と άλγος (苦痛・心配) を組み合わせて作った合成語であり、他郷にいる人が故郷に帰りたいと激しく思い焦がれるという内容を持っている。Hofer が医師であったことからわかるとおり、そもそもノスタルジーとは、人が心ならずも故郷から引き離されていることから生じる精神的な病理現象であった。その症状は落胆、鬱病、情緒不安定であり、悲嘆にくれる、食欲不振に陥る、病的に体力を消耗するといった重い発作的症状が含まれ、ときには自殺を図ることもあったという⁽⁶⁾。そして、その症状が戦争で故郷を離れていたスイス人傭兵に見られたということから、病理現象としてのノスタルジーは、故郷を離れているという状況に加えて、軍事と何らかの關係があると考えられたのであった。

(2) 心理現象

しかしながら、今日、ノスタルジーを病理現象として説明することはないといってよい。今日では、上記のような病理現象を指す語は「ホームシック」であり、ノスタルジーではない。そして、ホームシックは必ずしも軍事とは關係なく発症する。したがって、今日、ノスタルジーは病理現象としての意味を失うとともに、軍事との關係も失っているのである。社会学者の Fred Davis はそれを「脱軍隊化」(demilitarization)・「脱医学化」(demedicalization) と呼んだが⁽⁷⁾、そうした過程を経て、今日のノスタルジーは心理現象としての意味をもつものへと変容したのである。本稿において取り上げるノスタルジーも、病理現象ではなく、心理現象としてのそれである。

では、ここであらためて心理現象としてのノスタルジーの特徴について確認しておこう。ノスタ

ルジーは「懐かしさ」を伴った心理現象である。それは主体が持つ特定の記憶と結びついており、必然的に過去へのまなざしを持つものである。したがって、ノスタルジーの対象となり得るのは過去と結びついたものすべてであって、それは何らかの正の価値を持った過去である。そして、ノスタルジーが喚起する契機は主体の現在の状況において得られる。その状況によって選ばれた過去に対してノスタルジーは喚起する。

第2節 ノスタルジー概念を用いた諸研究

近年、このようなノスタルジーに対する関心が、心理学をはじめ、文学、哲学、歴史学、民俗学、地理学、観光学、社会学、経済学、政治学など、人文科学から社会科学にわたる広範囲の学問領域で高まっており、ノスタルジー概念を用いた事例研究がなされている⁽⁸⁾。

心理学の分野でノスタルジー研究が盛んなのは認知心理学の領域である⁽⁹⁾。ノスタルジーは、人の生涯において「青春時代」のような自分自身が最も輝いていた時代と密接に結びついているため、その記憶を積極的に蘇らせることが認知症の予防や治療につながる可能性のあることが指摘されている。

消費行動研究の分野ではマーケティングの観点からの研究が盛んである⁽¹⁰⁾。すなわち、人びとの心の中に懐かしさを感じさせる特定のノスタルジーが喚起されることで、それに対応する特定の消費行動が生じることから、意図的、操作的に特定のノスタルジーを喚起することによって、それと結びついた商品の購買意欲を高め、その結果、その商品や関連商品の売り上げを伸ばすことへとつなげていくといったことが模索されている。

また、映画『ALWAYS 三丁目の夕日』では「昭和30年代」の日本社会の風景が描かれていたが、そこから「昭和30年代ノスタルジー」が喚起されたことはよく知られている⁽¹¹⁾。メディア研究という点から、それは、メディアが持つ、ある特定のノスタルジーを喚起することで、その時代の記憶を「美しいもの」として蘇らせ、人びとの記憶の中に埋め込むことによって集合的記憶を形成し、継承させていくという機能を示している。

こうした集合的記憶の形成と継承はそれと関連する博物館や記念施設の建設、あるいは記憶を留めた場所や建造物の整備・保存、それらの観光への利活用といったものにも広がっていく。それは民俗学や地理学、観光学にも関係することになる⁽¹²⁾。

では、国際関係論におけるノスタルジー研究はどうであろうか。例えば、戦後の国際政治現象のひとつに脱植民地化があるが、脱植民地化後の本国と旧植民地において、帝国ノスタルジー(imperial nostalgia)と植民地ノスタルジー(colonial nostalgia)が起こっているという事例研究がある⁽¹³⁾。また、脱植民地化と並ぶ国際政治現象としての冷戦に関連して、その終焉によって起こったソヴェト社会主義共和国連邦(ソ連)の崩壊とその後ロシアでみられた「ソ連ノスタルジー」とも呼ぶべき現象⁽¹⁴⁾、あるいは東西ドイツ統一後のドイツでみられた「オスタルギー」(Ostalgie)と呼ばれる、東ドイツを懐古する社会現象などを対象とする事例研究がある⁽¹⁵⁾(ソ連と東ドイツの事例は「共産主義ノスタルジー」ととらえることもできる)。また、例えば、沖縄における「世界のウチナアンチュ

大会」を事例として、移民の送出地域と受入地域との国境を越える文化交流と、それによる越境的社会的空間の形成について論じた研究もある⁽¹⁶⁾。これは、ノスタルジーが背景となって国境を越えた交流を作り出した事例と考えることができ、ノスタルジー概念がトランスナショナル国際関係論に応用可能なことを示しているといえよう。

第3節 ノスタルジーの構成要素

本節ではノスタルジーの構成要素について整理する。

(1) 主体

ノスタルジーの主体は人間であり、個人と人間集団に分類される。主体を「一人の人間」ととらえる場合が個人である。個人は人間として生きてきた固有の生活史を有する存在であり、個人と結びついている過去は自分自身の固有の過去である。主体を「複数の人間」ととらえる場合が「人間集団」である。それには「過去と結びついた集団」のすべてが含まれる。具体的には、国民・民族・地域住民といった特定の地域と結びついた集団であり、言語や風俗習慣、文化など、固有のアイデンティティを有した存在である。また、特定の宗教や学術、スポーツ、文化などを核とする団体に集う人間集団も、団体に関わる過去と結びついているので、ノスタルジーの主体となり得るであろう。さらに、やや漠然とはしているが、同じ時代を生き、その時代の文化を共有する人間集団である「世代」も、特定の過去と結びついているので、ノスタルジーの主体となり得る⁽¹⁷⁾。ここで、個人を主体とするノスタルジーを「個人的ノスタルジー」、人間集団を主体とするものを「集会的ノスタルジー」と分類しておきたい。

(2) 記憶

ノスタルジーの主体は記憶を有する存在であり、先の分類にしたがえば、個人的ノスタルジーは個人的記憶と、集会的ノスタルジーは集会的記憶と結びついている。個人的記憶はその人のみが有する固有の体験が蓄積・保存されたものであり、他者との共有はできない。そして、それはその人の一生の範囲内であるという点で「自伝的記憶」と呼ばれるものである。それに対して、「集会的記憶」は同一の人間集団によって得られた共通の体験が蓄積・保存されたものであり、その集団の構成員間で共有することが可能である⁽¹⁸⁾。

集会的記憶が個人的記憶と決定的に異なる点は、記憶の範囲が人の一生を越えた過去にまでさかのぼることができるということである。例えば、ある民族の歴史は人の一生の範囲に収まるものではなく、それをはるかに超えている。その民族の構成員間で共有される民族の記憶は、現在に生きる構成員が生まれる以前の事象の記憶であることもあり、それは文字や語り、あるいは遺物などによって過去から受け継がれてきた記憶であって、さらに未来へと引き継がれていくべき記憶である。ここで、このような記憶を、「自伝的記憶」と対置して「歴史的記憶」と分類しておきたい。

なお、ノスタルジーにおける記憶は正の価値を有する記憶であった。現実には、そのすべての記憶が正の価値を持つわけではなく、負の価値を持つものもあるはずである。しかし、ノスタルジーは、膨大な記憶の中から正の価値を有するもののみを選別するのである。こうして選別された記憶

によって復元される過去は、負の価値を持つ記憶を振るい落としてできた、いわば「浄化された過去」である⁽¹⁹⁾。本節ではそれをノスタルジーの浄化機能と呼んでおきたい。

(3) 契機

ノスタルジーは何らかの契機によって喚起する。前述のとおり、ノスタルジーは特定の記憶と結びついており、特定の過去と結びついている。こうした特定の記憶と過去を呼び覚ますには何らかの契機が必要である。換言すれば、何の契機もないところにノスタルジーは立ち現れない。本節では、この契機を「偶発的なもの」と「操作的なもの」に分類して考えたい。それぞれを契機とするノスタルジーを「偶発的ノスタルジー」と「操作的ノスタルジー」と呼んでおきたい。

まず、偶発的契機については、文字通り、偶然に起こった出来事がノスタルジーを喚起する契機を指す。「はじめに」で例示したように、部屋を片付けていた時に見つけた思い出の写真や土産品、テレビやラジオから流れてきた青春時代のヒットソングなどはその典型的な事例であろう。同窓会での友人との再会や大学時代に住んでいた場所の再訪は、そもそもそうした懐かしい思い出が蘇る機会や場であることが予定されており、文字通りの偶然ではない。それらは自らの意思によって得られた契機であり、「自発的契機」と呼ぶべきものであろう。

次に、操作的契機については、他者によって何らかの意図をもって用意された契機を指す。前述した事例を取り上げるならば、認知心理学において個人の青春時代の記憶をよみがえらせることは認知症の予防や認知症患者への治療としての心理療法であり、意図的、操作的に行われる。消費行動研究におけるノスタルジーは、ある世代の人びとが懐かしさを共有しうる映像やBGM、CMなどを使って、その世代の人びとに特有のノスタルジーを喚起し、その集合的記憶と結びついた商品の消費拡大につなげるという意図を持ったものであった。また、「昭和30年代ノスタルジー」は、保守政治家たちによって、操作的に「古き良き昭和」のイメージとして強調され、今では失われた、あるいは変容した当時の意識や価値観の復活へとつなげていこうとした。これらの事例において、ノスタルジーは、それによって実現される何らかの意図や目的のために操作的に喚起されたのである。

(4) 時間

ノスタルジーは過去と結びついている。時間は不可逆性という本質を持っている。したがって、言うまでもなく、主体にとって過去とは二度と戻ることのできないものである。主体のまなざしは現在からそのような過去へと向けられる。蓄積され、保存された膨大な過去の中で、ノスタルジーの対象となる「過去」は「特別な過去」である。その「特別さ」は、「懐かしさ」に見られるように、何らかの正の価値を有する過去であることに由来する。具体的には、「青春時代」や「黄金時代」という言葉で表現される「輝いていた過去」である。Fred Davisによれば、「輝いていた過去」は「輝きを失った現在」とあざやかな対照を示す⁽²⁰⁾。このような対照性が主体をして「特別な過去」へとノスタルジーを喚起することになる。青年から熟年を経て老年へと至る自分自身の変化、定年や引退など年齢を重ねることに関係する変化だけではなく、自分自身に大きな変化がなくとも、自分を取り巻く時代や社会が変化することもあるであろう。そのような変化に伴う断絶性あるいは非連続性、対照性といった意識が、主体をして「特別な過去」へと、二度と戻ることのない過去へと

向かわせるのである。

では、ノスタルジーが「未来」と結びつくことはないであろうか。記憶が過去と結びついている以上、「未来の記憶」というものは存在しえない。しかし、未来を視野に入れた過去の振り返りというのはありうるであろう。すなわち、現在の状況が「特別な過去」と対比して劣位にあるとして、消極的に「昔はよかった」式の感傷に浸るだけの単なる過去の振り返りにとどまることもあれば、「輝きを失った現在」の状況を打破するために「輝やっていた過去」を振り返って積極的に未来を切り開いていこうとする場合もあるであろう。本稿では、前者を「消極的ノスタルジー」と呼び、後者を「積極的ノスタルジー」と呼んでおきたい。

(5) 空間

ノスタルジーは「故郷」や「思い出の地」といった「特別な場所」と結びついている。本稿では、場所そのものだけではなく、その場所を構成するものすべてを含みうる概念として「空間」という語を用いることにする。

ノスタルジーにおける空間とはどのようなものであろうか。本稿では、それを地理的空間、歴史的空間、文化的空間の3つに分類しておきたい。

第1に、地理的空間とは海や川、山といった自然地理的空間を意味するとともに、町や村といった人文地理的空間も含む。海や川、山などの自然がノスタルジーを喚起することは言うまでもないが、町や村の景観がノスタルジーを喚起することもあるからである。

第2に、歴史的空間である。これは特定の時代と結びついている特定の空間を意味する。それがノスタルジーを喚起する、あるいはその時代の雰囲気を感じたいがためにその空間自体を求めるといったことにつながっていく。例えば、岡本太郎の「太陽の塔」は1970年に大阪で開催された万国博覧会と結びついている。それは大阪万博を経験した人々にとってはノスタルジーを喚起するシンボルとなる。

第3に、文化的空間である。これは特定の文化と結びついている特定の空間を意味する。例えば、東京の新大久保に現出した「コリアンタウン」や横浜の中華街などが挙げられる。「コリアンタウン」は韓国や朝鮮の人びとにとって、あるいは「横浜中華街」は中国の人びとにとって、故郷を追憶できる空間であろう。また、特定の文化というわけではないが、井沢八郎のヒット曲「あゝ上野駅」にあるように、地方から東京へと集団就職でやってきた若者たちにとって上野駅は象徴的な空間であったであろう。上野駅は故郷の匂いの混じった独特の文化的空間、「心の駅」となっていたのである。

(6) 時間的存在としての空間

空間は時間的存在である。すなわち、時間の経過とともに変化していくことをのがれることはできない。この点から、空間とノスタルジーの喚起についてまとめておきたい。

第1に、変貌である。これは、特定の空間が現在でも存在してはいるが、その様相が大きく変貌してしまったことを意味する。例えば、近代化や人口増加に伴った高層ビルの建築、山を削ったり海を埋め立てたりしての大規模な宅地造成、あるいは大型量販店の進出に伴う商店街の解体などにより、目の前に広がる光景は大きく変わってしまう。空間の変貌前後では大きな断絶があり、そこ

にノスタルジーが喚起される契機が存在することになる。

第2に、消滅である。これは文字通り、ノスタルジーの対象となる空間が、何らかの理由で失われてしまったことを意味する。例えば、2011年に発生した東日本大震災によって自分の家が地震で倒壊したり、その後に発生した巨大津波に故郷が飲み込まれて消滅したりした事例が挙げられる。これは自然災害が消滅の理由であるが、戦争によって故郷が破壊された場合は人為災害がその理由となる。故郷の喪失は、それがもはや存在しないからこそ、存在していた当時のことを懐かしく振り返ることもあるであろう。存在していた頃の故郷へのノスタルジーは、被災地の復旧のみならず復興という新たな故郷の創出へとつながっていくエネルギーを生み出すことになる可能性を含んでいる。この場合、そこで喚起するノスタルジーは「未来の創造」を視野に入れた「積極的ノスタルジー」ということになるであろう。

第3に、不在である。これは、現在、故郷や思い出の地などノスタルジーを感じる場所に主体がいないことを意味する。例えば、先述の啄木の歌にあるように、読み手自身が故郷にいないからこそ、故郷の訛を耳にして故郷に懐かしさを覚え、場合によっては「故郷に帰りたい」という語源的な意味でのノスタルジーが喚起するのである。日常的に故郷の訛を耳にする状況にあれば、すなわち、それは主体が故郷にいることを意味するのであり、故郷へのノスタルジーは喚起されない。自分自身が故郷にいないからこそノスタルジーは立ち現れるのである。ここには過去は必ずしも介入しない。換言すれば、「輝いている過去」と「輝きを失った現在」という断絶あるいは対照は必ずしもみられない。むしろ、その断絶、対照は空間的に存在するのである。

(7) 人・物

人は社会的存在である。人は一人では生きていくことができないのであり、自己以外の他者との関係で人に対する記憶を積み重ねていく。しかし、人は移動する存在であり、また死すべき存在である。したがって、自身が積み重ねてきた他者との関係は状況に応じて、いつか必ず絶たれてしまうことになる。その時、人は関係を絶たれた他者を想起する契機を持つことになる。故郷という空間へのノスタルジーが、家族や友人など人に関する記憶の呼び覚ましと重なるのはそのためである。

では、特定の人ノスタルジーの対象となるのはどのような状況においてであろうか。すなわち、それはその人との別れが生じたときであろう。それは生別の場合もあり、死別の場合もある。とりわけ、死別はその人との未来における関係が永遠に絶たれたことにより、その人との関係のすべてが過去のものとなる。その人との関係が親しく濃いものであればあるほど、思い起こされる過去は美しく、懐かしいものとなるであろう。その場合、特定の時間や空間がノスタルジーの対象となっていくのは、その人との関係があればこそであるということになる。

同様のことは物についても言えるであろう。すなわち、物はそれ自体が何らかの過去と結びついており、それはその物と関係する主体の記憶と結びついているからである。例えば、自伝的記憶の観点からは誕生日の贈り物や卒業や結婚の記念品、家族や友人との旅行の土産品などが挙げられるし、歴史的記憶では先述した「太陽の塔」は象徴的である。「太陽の塔」は、1970年に大阪で開催された万国博覧会の際に作られたものであり、その時代、その場所での集合的記憶となる建造物である。それは、高度成長を遂げた日本の象徴であり、当時の日本国民にとっては輝かしい象徴であっ

た。それらは、その人が生涯を閉じたときに失われる自伝的記憶とは違い、歴史的建造物として世代を越えて残っていき、自分たちに続く世代の人々に輝かしい記憶とともに継承されていくものである。

以上、本節ではノスタルジーの概要について、現象と構成要素に焦点を当ててまとめてきた。次章では、このようなノスタルジーがどのように国際関係論に応用できるのか、検討していきたい。

第2章 国際関係論への応用

第1節 主体

国際関係論においては、ノスタルジーの主体には個人と人間集団のどちらもなり得る。ノスタルジーの主体は必ず過去と結びついた個人、集団でなければならない。換言すれば、個人にはその個人に固有の、集団にはその集団固有の過去がなければならない。その過去は個人の関係する団体、あるいは集団を構成員とする団体と結びついた過去である。そして、時間的存在としての空間と結びついた過去である。

その単位としては、基本的には国家と非国家が挙げられる。国家主体は文字通りの国家である。非国家主体は地方公共団体、地域、あるいは文化団体や経済団体などが挙げられるであろう。国家と結びついた個人は政治家や官僚などであり、人間集団は国民である。国際関係論を国家間関係としてみると、ある国家と別の国家の間に、ある国民と別の国民との間にノスタルジーを喚起する時間的・空間的關係が存在する場合、それぞれの国家と国民はノスタルジーの主体になり得る。

地方公共団体を単位とするのは、地方政治家や利益関係者といった個人、あるいは県民や市町村民などである。この場合、ある地方公共団体が外国の別の地方公共団体と何らかの歴史的関係を有しているとき、それぞれの地方公共団体と関係する個人や、団体の構成員である県民や市町村民などの集団はノスタルジーの主体になり得る。それは友好姉妹都市提携などへと展開していく可能性を含んでいる。

地域と結びついているのは、そこに居住している地域住民であり、あるいは、そこに地域固有の言語や文化・風俗習慣などがみられる場合は、民族である。ここで、地域におけるノスタルジーの主体を民族とした場合、民族がノスタルジーの主体になり得るには、国境を越えて存在しているそれぞれの民族がルーツを同じくする場合と、まったく別の民族に属する場合が想定される。ルーツを同じくする民族の場合には、それは民族的故郷と結びつくことになる。別々の民族の場合にはそこに何らかの歴史的関係が存在することになるであろう。

脱植民地化を例にとれば、旧宗主国とそこから独立を達成した旧植民地との関係が基本であるので、その主体は旧宗主国の政治リーダーや植民地官僚あるいはその国民、および脱植民地化して独立国家となった旧植民地のリーダーとその国民である。また、東西ドイツの統一を例にとれば、旧西ドイツの政治家や国民と旧東ドイツの政治家や国民がノスタルジーの主体になる。地方公共団体の場合では、移民送出県であった沖縄県と、例えば、移民受入州となった米国のハワイとの関係が例として挙げられる。この場合のノスタルジーの主体は、沖縄県の政治家や県民、沖縄からハワイ

に移住した移民とその子孫、ハワイの政治家や民間団体などが考えられるであろう。

第2節 記憶

国際関係論における記憶は、個人でいえば自伝的記憶であり、人間集団でいえば歴史的記憶である。そのいずれもが正の価値を有する記憶である。そして、選別されたこの記憶をもとに復元される過去は、ノスタルジーの機能によって「浄化された過去」である。自伝的記憶は、主体である政治家や官僚など個人の栄光と結びついている。歴史的記憶は、国家や民族などの黄金時代と結びついている。

先述のとおり、ノスタルジーが喚起するのは、主体の現在の状況による。現在の状況とノスタルジーによって呼び起こされた過去との関係は断絶しているか非連続であり、対照的でもある。すなわち、ノスタルジーが喚起するとき、現在の状況は過去と比較して、政治的、経済的、文化的な領域で何らかの劣位にある。政治的には国際社会での指導的地位の低下や権威の失墜、経済的には経済的発展の鈍化や衰退、文化的にはかつての文化的価値の喪失などが挙げられるであろう。こうした優位にある過去と断絶して劣位にある現在の状況は、主体をして優位にあった過去へと視線を向けさせることになる。

冷戦終焉後、ロシア連邦においてみられた「ソ連ノスタルジー」には、共産主義というイデオロギーが描いていた「理想」の喪失が背景としてある。この場合、ソ連ノスタルジーが選び出した記憶は、具体的にはブレジネフ書記長の時代であった。この記憶を選び出したノスタルジーは、ブレジネフ時代のソ連を、理想が文字通りの理想として信じられていた時代として復元してみせたのである。

同様に、旧東ドイツを中心にみられた「オスタルギー」という現象は、西ドイツとの統合によるドイツ統一が、東ドイツが実現していた共産主義の放棄を伴うものであったことが背景にある。ここで、オスタルギーが呼び起こした記憶は、ソ連と同様、共産主義の理想が東ドイツに実現していた時代を復元しようとしたのである。

沖縄とハワイとの関係を例にとると、沖縄という故郷を離れてハワイという他郷で暮らすことになった第1世代の移民たちが、故郷への思いをオキナワン・フェスティバルのようなかたちで記憶に基づいて具現化し、可視化したことにより、沖縄の記憶が移民第2世代に継承されたことが挙げられる。ソ連ノスタルジーとオスタルギーには時間的断絶が背景としてあるが、沖縄とハワイの関係はむしろ空間的断絶が背景となっている。それがルーツとしての沖縄への視線をハワイから向けることになるのである。

第3節 時間

国際関係論における時間は人の一生を越えない自伝的記憶の範囲と、世代を超えて遡ることのできる歴史的記憶の範囲の双方を含む。

前節で取り上げた事例のうち、ソ連ノスタルジーとオスタルギーの事例は、旧ソ連と旧東ドイツで実際に生きられた過去が主たる対象であり、時間的範囲は自伝的記憶の範囲である。

ソ連ノスタルジーが主たる対象としたブレジネフ時代は1960年代半ばから80年代初頭の時代で

あり、その時代を生き、現在のロシア連邦時代を生きている旧ソ連国民は今なお存在する。彼らはソ連時代からロシア連邦時代への移行という時間的断絶を経験し、それが政治的・経済的・社会的に引き起こした急激な変化を伴うものであったがゆえに、旧ソ連時代へのノスタルジーを掻き立てることになったのである。旧ソ連時代を懐かしむ人々からすれば、ロシア連邦への移行は様ざまな負の変化をもたらした。旧ソ連時代は経済的に豊かではなかったが、人びとが助け合って生きていた時代であった。物不足であったがゆえに、壊れても修理して使うといったように、一つ一つのを大切にする時代であった。彼らは旧ソ連時代を正の価値を有していた時代と懐古し、ロシア連邦時代をそれらが喪失した時代と認識したのである。その時代のすべてが正の価値に満たされていたわけではないことは言うまでもない。ノスタルジーはその時代から負の風景を除去して浄化したのである。

オスタルギーについては、東西ドイツの統一後、東ドイツだけでなく西ドイツでもみられた、旧東ドイツ時代を懐古する現象である。先述のソ連ノスタルジーにみられたような、共産主義時代の東ドイツを正の価値を有していた時代として振り返るのである。旧東ドイツの場合は、東ドイツが西ドイツと統合されて統一ドイツという新国家が生まれたのであるが、実際は「自由で豊かな西ドイツ」に「自由を制限された貧しい東ドイツ」が吸収されるというものであった。新しい国家の基準はすべて西ドイツのものであり、東ドイツのものではなかった。旧東ドイツ国民にとってそれは東ドイツ時代の根底からの否定であった。このような東ドイツ時代から統一ドイツ時代への移行が時間的断絶となり、主として旧東ドイツ国民からオスタルギーが呼び起こされたのである。

ソ連ノスタルジーとオスタルギーの事例については、厳密には「国際関係論」ではなく一国の政治史の文脈で語られるべき事例である。しかし、例えば、ロシアが旧ソ連時代に米国と並ぶ超大国であったという記憶は世代を超えて継承され続けるのであり、それはロシアの国際政治上の地位が低下していったときに、ノスタルジーの対象として復活していくものでもあるであろう。それが国際関係に何らかの影響を及ぼすであろうことは想像に難くない。ロシアが旧ソ連時代に持っていた栄光を現代に復活させようとするのであれば、それは「輝かしい未来の再創造」を視野に入れたものとして現れることになる。

第4節 空間

ノスタルジーにおける空間は時間的存在としての空間である。先述のとおり、それは地理的空間であり、歴史的空間・文化的空間であった。実際には、ある特定の空間は地理的存在であるとともに歴史的・文化的存在でもあり、複合的な性格を持つものとして理解されるべきであろう。

国際関係論における空間も同様である。前節で取り上げたソ連ノスタルジーとオスタルギーは、時間的断絶によって引き起こされたノスタルジーであり、地理的空間としての変化はない。しかし、時間の経過とともに文化的風景は変貌していく。統一ドイツにおいて「統一」の名のもとに、信号機など旧東ドイツ時代の建造物が撤去された事例などがそうである。その結果、旧東ドイツ国民が生きた証としての風景が大きく変貌していくとともに、旧東ドイツ国民の間に旧東ドイツ時代の歴史的空間を懐古し、その象徴となるものを残そうとする動きへとつながった。旧東ドイツ時代に信

号機で用いられた「アンペルマン」⁽²¹⁾はその代表である。

地理的空間については、移民を事例に挙げれば、移民元と移民先との空間的断絶という事例がある。人間は「文化を纏って移動する存在」である。移民という人の移動は移民元の文化と移民先の文化が接触することにつながる。それが移民先での文化対立、ひいては民族対立を引き起こす可能性がある一方で、移民元の文化が祭祀儀礼やフェスティバルなどを通じて世代を超えて定着し、継承されていく。それは自分たちのルーツにつながる歴史的記憶であり、それによって喚起されるノスタルジーは移民元と移民先に分断された空間を結び合わせることになる。1990年以降、ほぼ5年ごとに沖縄県が開催している「世界のウチナーンチュ大会」などはその典型的な国際イベントである。沖縄県は移民送出県として長い歴史を有してきた。それは他県にはない沖縄県特有の歴史であり、資源であった。沖縄県は、西銘順治知事時代に、このような沖縄県独自の資源を積極的に活用して越境的ネットワークを作り上げようとした。それは、沖縄という歴史的故郷を離れて他郷で生活している移民にとって「帰郷」の機会となるものであり、自分たち自身のルーツへと回帰することでアイデンティティの確認にもつながるものであった。

このような事例は、バスク民族についても同様にみられる。海外に居住するバスク民族は、それぞれの場所でバスク・コミュニティを形成し、バスク民族としてのアイデンティティを保持しているが、それらを結びつけたイベントが「ハイアルディア」と呼ばれる国際バスク文化フェスティバルである⁽²²⁾。また、ケルト系民族については、フランスのブルターニュの都市であるロリアンで、毎年8月に開催される「インターケルティック・フェスティバル」の事例がある⁽²³⁾。同フェスティバルは10日間の開催期間で、アイルランドやイギリスのウェールズ、スコットランド、スペインのガリシア地方などのケルト系民族の居住地域から約40万人もの観光客を集めている。

その他としては、国際友好姉妹都市の提携も事例として含まれる可能性があることも指摘しておきたい。

このように、ノスタルジーは、地理的に分断された空間をつなぎ合わせる機能を持つ。その分断が国境を越えて存在し、空間と空間の間に歴史的関係が存在しているとき、ノスタルジーは、フェスティバルなどの様々なイベントを通して新たな未来を創造しようとするのである。

第5節 国際関係論への応用可能性

(1) 分析への応用可能性

本稿では、ノスタルジーについて、主体においては「個人的ノスタルジー」と「集合的ノスタルジー」に分類し、記憶では「自伝的記憶」と「歴史的記憶」に、契機では「偶発的ノスタルジー」と「操作的ノスタルジー」に分類した。そしてノスタルジーの目的では「消極的ノスタルジー」と「積極的ノスタルジー」に、対象では「時間的ノスタルジー」「空間的ノスタルジー」「人へのノスタルジー」「物へのノスタルジー」に、それぞれ分類した。これらのノスタルジーは国際関係論の分析にどのように応用が可能なのであろうか。

本稿で取り上げた事例についてみてみよう。まず、ソ連ノスタルジーである。これは、旧ソ連国民を主体とする集合的ノスタルジーであり、自伝的記憶に基づくものであった。その契機は冷戦の

終焉とそれに続くソ連の解体という偶発的なものであった。そしてノスタルジーの対象はブレジネフ時代であり、ブレジネフ個人にも向けられた。すなわち、時間的ノスタルジーであり、人へのノスタルジーを伴っていた。しかしながら、それはソ連への回帰という方向性を持ってロシア連邦という現状を変革することが射程に入っていないことから、旧ソ連を懐古するだけの消極的ノスタルジーに留まるものである。

次に、オスタルギーである。これは、旧東ドイツ国民を主体とする集合的ノスタルジーであり、その契機は冷戦の終焉と東西ドイツの統一である。そして、その統一が西ドイツの主導で、東ドイツからすれば自己否定的に行われたということであり、それらは偶発的契機である。その現われの一例として挙げられるのは「アンペルマン」という東ドイツ発祥のキャラクターの保存運動の展開であった。それは物へのノスタルジーである。それは、旧東ドイツ国民の自己肯定あるいはアイデンティティの連続性確認につながるものであり、その意味で積極的ノスタルジーと考えられるものである。

最後に、沖縄系移民の沖縄へのノスタルジーについては、主体は沖縄系移民である。沖縄系移民は、世代を超えて沖縄の記憶を継承し続けてきた。それは、第1世代については自伝的記憶であり、第2世代以降は歴史的記憶である。そこには祭祀儀礼やイベントによって沖縄の記憶を継承するとともに、離れた故郷に対するノスタルジーを喚起した。それは故郷に向けられた空間的ノスタルジーである。そして、移民元の沖縄県では沖縄系移民たちと沖縄を結ぶイベントとして「世界のウチナーンチュ大会」が企画され、移民たちに帰郷の機会を作り、それが定期的に行われることによって相互に文化交流を盛んにするという効果をもたらした。これは積極的ノスタルジーであり、操作的ノスタルジーであろう。

以上のように、ノスタルジーは国際関係現象に対する分析ツールとして応用可能であることがわかる。

(2) 政策への応用可能性

政策につながるノスタルジーは「積極的ノスタルジー」「操作的ノスタルジー」である。そもそも、ノスタルジーによって蘇った過去は、その当時の過去そのものではない。時間は不可逆であり、過去を復元しても、そこには何らかの意図や操作が含まれており、したがって完全な意味での「真正性」を持つものとは言えない。過去の復元の意図や目的などを決めるのはノスタルジーの主体における現在の状況であろう。

本稿で取り上げた事例でいえば、やはり沖縄系移民の事例が好例となる。沖縄県は、1990年、「世界のウチナーンチュ大会」を開催した。当時、沖縄県知事であった西銘順治は沖縄が歴史的に移民送出県であったことに注目し、世界で活躍する沖縄系移民と沖縄県をつなぎ、越境的ネットワークを形成する政策として「世界のウチナーンチュ大会」を政策化した。これは、沖縄系移民からすれば自分たちのルーツである懐かしい故郷に里帰りすることになるとともに、沖縄県民からすれば、沖縄の持つ国際性を確認することになる。例えば、沖縄からの移民が最も多かったのが米国のハワイであるが、ハワイでは、毎年8月から9月にかけて「オキナワン・フェスティバル」が開催され、移民第1世代に続く世代の人々によって沖縄の記憶が継承されている。同フェスティバル自体が

ノスタルジーの産物であろうし、そのようなハワイの沖縄系移民にとって「世界のウチナンチュ大会」は沖縄との関係をより緊密にしていくために望ましいイベントとして映ったのである。そのことは、以後、ほぼ5年ごとに開催されている「世界のウチナンチュ大会」にハワイからの参加者が最も多いことでもわかる。

ノスタルジーは正の価値を有する過去を選び出す機能を持つ。ノスタルジーを政策に応用することにより、主体間には双方にとっての明るい記憶のみが選別されて共有されることになり、その記憶に基づいて主体間に友好関係が築かれていくのである。上記沖縄とハワイの事例のように、ノスタルジーは主体間における国際交流の政策化という観点からも有効であることがわかる。

おわりに

以上、本稿ではノスタルジーを鍵概念とする国際関係論の可能性について考察してきた。ノスタルジーという概念は心理学をはじめ様々な学問領域において重要な分析視覚となり得るものであった。本稿では、ノスタルジーの構成要素を整理することにより、それらが国際関係論にも応用可能であることを確認した。

国際関係論は国際関係現象を取り扱う学問である。そして、その現われは主体の多様性という点を考えるだけでも複雑である。しかしながら、ノスタルジーの主体間には、ノスタルジーによって選び出された「正の価値を有する特別な過去の記憶」を共有することでより緊密な関係を構築していく可能性が開かれていくのであり、その点は新たな国際関係の構築という可能性を示しているということでも重視したい。

註

- (1) 「ノスタルジー」は仏語の *nostalgie* の音を写した表記である。英語では *nostalgia* であり、「ノスタルジア」と表記される。本稿ではノスタルジーを基本とするが、書名や論文名などでノスタルジアが用いられている場合にはその表記にしたがう。
- (2) エピソード記憶や長期記憶、潜在記憶等の定義や意味については、次の文献を参照。梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田新監修、『新版 心理学事典』、平凡社、1994年、130-133頁。マイケル・W・アイゼンク、白樫三四郎・利島保・鈴木直人他監訳、『アイゼンク教授の心理学ハンドブック』、ナカニシヤ出版、2009年、455-457頁。
- (3) 社会学者の Fred Davis は、誰もが同意する一点があるとすれば、それはノスタルジー体験の題材が「過去」であることであると述べている（フレッド・デーヴィス、間場寿一・荻野美穂・細辻恵子訳、『ノスタルジアの社会学』、世界思想社、1990年、13頁）。なお、原著は Davis, Fred *Yearning for Yesterday: A Sociology of Nostalgia*, New York, The Free Press, 1979年、である。本稿では訳書からの引用を基本とするが、必要に応じて訳語は原著に基いて改変していることをあらかじめ断っておく。
- (4) デーヴィスは、「われわれが過去を意識すること、過去を呼び起こすこと、それはまざしく過去であるとわれわれが知っていること自体が、現在の体験以外のなにものでもありえないのだから（中略）、われわれがノスタル

ジアを感じるきっかけとなる要因はやはり現在のなかに存在しているはずである」と述べている（同前、15頁）。

- (5) Hofer のこの論文は、1934 年に英訳されている。Hofer, Johannes, "Medical Dissertation on Nostalgia" *Bulletin of the History of Medicine*2 (1934): pp.376-391. なお、津上英輔は『あじわいの構造 感性化時代の美学』（春秋社、2010 年）において、Hofer のノスタルジーを「負のノスタルジー」としている。
- (6) デーヴィス、前掲書、4 頁。
- (7) デーヴィス、前掲書、6 頁。
- (8) ノスタルジー概念を用いた研究については、さしあたり次の文献を挙げておく。宮城学院女子大学人文社会科学研究所編、『ノスタルジーとは何か』、翰林書房、2018 年。なお、筆者は、同書において「序 ノスタルジーという概念をめぐる」にてノスタルジーについてまとめている。本稿におけるノスタルジーに関する記述にはそれと重なるところがあることをあらかじめ示しておく。
- (9) 例えば、次のような文献が挙げられる。楠見孝編、『なつかしさの心理学—思い出と感情』、誠信書房、2014 年。
- (10) 例えば、次のような文献が挙げられる。堀内桂子、「消費者のノスタルジア—研究の動向と今後の課題」、『成城文藝』第 201 号、2007 年、(1) 198-(20)178 頁。高橋尚也・川上善郎・川浦康至、「商店街に対する態度と購買意識の類型別にみた個人の社会的資源」、『立正大学心理学研究所紀要』第 13 号、2015 年、15-24 頁。
- (11) 例えば、次のような文献が挙げられる。Katsuyuki, HIDAKA, *Yearning for Yesterday: Representations of Tokyo Tower within Unfinished Modernity of Showa Nostalgic Media*, *Ritsumeikan Social Sciences Review*, 第 46 巻 第 2 号、2010 年、25-45 頁。市川孝一、「昭和 30 年代はどう語られたか—“昭和 30 年代ブーム” についての覚書」、『マス・コミュニケーション研究』、No.76、2010 年、7-22 頁。浅岡隆裕、「昭和の風景への / からの視線—メディアの語りのなかの昭和 30 年代」、『マス・コミュニケーション研究』、No.76、2010 年、23-41 頁。
- (12) 例えば、次のような文献が挙げられる。青木俊也、「昭和 30 年代生活再現展示とノスタルジアにみるフォークロリズム的状况」、『日本民俗学』236 号、2003 年、82-91 頁。川森博司、「ふるさとを演じる—遠野におけるノスタルジアと伝統文化の再構成」、山下晋司編『観光文化学』（新曜社）2009 年、109-114 頁。
- (13) 例えば、次のような文献が挙げられる。Lorcin, M.E. Patricia, *France's Nostalgia for Empire*, Emile CHABAL ed., *France since the 1970s History, Politics and Memory in an Age of Uncertainty*, BLOOMSBURY, London · New Delhi · New York · Sydney, 2015. pp.143-171.
- (14) 例えば、次のような文献が挙げられる。石丸敦子、「ロシアにおける崩壊直後のノスタルジー現象を読み解く—『ブレジネフ再考』を読んで—」、『クアドランテ』No.18、2016 年、113-122 頁。石丸敦子、「ノスタルジーのカルチュラル・スタディーズ—ヴェトラナ・ボイム『ノスタルジーの未来』の描くロシア」、『クアドランテ』No.17、2015 年、175-186 頁。
- (15) 例えば、次のような文献が挙げられる。柳原伸洋、「モノから想起される 2 つのノスタルジー—ドイツのオスタルギーから日本の空襲マンガまで—」、『コンテンツ文化史研究』Vol.12、86-100 頁。木戸衛一、「ノスタルジーか自己エンパワーメントか—東ドイツにおける『オスタルギー』現象」、高橋秀寿・西成彦編『東欧の 20 世紀』（人文書院）、2006 年、239-268 頁。
- (16) 例えば、次のような文献が挙げられる。石川朋子、「南米における沖縄移民の特質」、『沖縄法政研究』第 16 号、2014 年、1-31 頁。野入直美、「『世界のウチナーンチュ大会』と沖縄県系人ネットワーク（2）—参加者の〈声〉に見るアイデンティティと紐帯の今後」、『移民研究』第 4 号、2008 年、97-115 頁。金城宏幸、「『世

- 界のウチナンチュ大会』と沖縄県系人ネットワーク (5) —新たな社会空間の形成と紐帯をめぐって—、『移民研究』第5号、2009年、41-50頁。新垣誠、「グローバリゼーション、国民国家、そして『ホーム』としての沖縄：『世界のウチナンチュ』という物語の可能性」、『沖縄キリスト教学院大学論集』第13号、2017年、23-35頁。
- (17) 「世代」については、デーヴィス、前掲書、158-164頁。
- (18) 集合的記憶については、次の文献を参照。モーリス・アルヴァックス、小関藤一郎訳、『集合的記憶』、行路社、1999年。モーリス・アルヴァックス、鈴木智之訳、『記憶の社会的枠組み』、青弓社、2018年。金瑛、『記憶の社会学とアルヴァックス』晃洋書房、2020年。
- (19) デーヴィス、前掲書、20-25頁。
- (20) 同前、23-24頁。
- (21) アンペルマンについては、次の文献を参照。高橋徹、『アンペルマン 東ドイツ生まれの人気キャラクター』、郁文堂、2015年。
- (22) ハイアルディアについては、次の文献を参照。萩尾生、吉田浩美編著、『現代バスクを知るための50章』、明石書店、2018年、166-168頁。金城宏幸、「文化共有集団の越境的ネットワークに関する国際比較研究序説：バスク人とウチナンチュの言語文化をめぐる社会空間の形成」、『移民研究』第12号、81-98頁。
- (23) インターケルティック・フェスティバルについては、次の文献を参照。今林直樹、「ロリアンのインターケルティック・フェスティバル」、今林直樹『地域の構築・記憶・風景—沖縄・ブルターニュ・バスクー—』、晃洋書房、2020年、85-91頁。鶴巻泉子、「グローバルな地域文化としてのケルト—インターケルティック・フェスティバルにみる現代の『ブルターニュ』の意味づけ」、定松文『フランスにおける地域文化振興と社会構造に関する社会学的研究』（2004（平成16）年度～2006（平成18）年度科学研究費補助金（基盤研究(C) (1)）研究成果報告書、2007年。

Nostalgia and International Relations

IMABAYASHI Naoki

Nostalgia is a personal or collective feeling toward one's past or hometown. The concept of nostalgia is frequently used in numerous fields, such as psychology, marketing studies, history, geography, folklore, literature, philosophy, economics, and politics.

However, what about International Relations (IR)? Nostalgia is not as popular in the field of IR, but is it useless for this field? The answer is "No."

In this study, the author analyzes the concept of nostalgia from multiple viewpoints, for example, as an actor (personal or collective), memory (personal or collective), occasion (accidental or intentional), time (personal lifetime or historical), space (geographical or/and historical or/and cultural), persons, and things deeply connected with the actor's memory.

IR focuses on the relations among nations, ethnicities, and regions. Each relation has an original history, past, and memory connected with nostalgia. Therefore, analyzing the phenomena of IR using the concept of nostalgia is possible and useful. In addition, it is effective in the construction of novel relationships among the actors.